

人間研究学域 入学前課題講評

今回の入学前課題では、例年同様、人間研究学域での学びと密接に関連する五つの著書を課題テキストとして指定し、その中の一つの文献について、要約と批評を課しました。以下に全体の講評と文献別の講評を記します。

【全体の講評】

- 課題テキストの内容を大幅に逸脱した要約は見当たらず、みなさんそれなりにきちんと文献を読み、その内容を理解している様子が窺われました。
- プレエントランスデーの学域別企画において過年度の講評を配布してもらった効果もあってか、自分の体験に引き寄せた感想や「自分語り」は大幅に減少し、多くのレポートでは文献と真剣に向き合う様子も見られました。
- とはいえ、「著者と真摯に対話」していることがありありと見てとられるレポートは、残念ながら皆無でした。昨年度講評の関連箇所を再掲します。

テキストを批評するからには、自分独自の（ある意味では自分勝手な）議論を展開するためのきっかけや素材としてテキストを利用するのではなく、テキストの著者が取り組んでいるまさにその問題の枠内にとどまって、テキストの著者と真摯に対話するという姿勢がまずもって必要です。

（あなたが著者と対話できているかどうかを確かめるには、次のような方法を試してみるのがよいでしょう。あなたが著者に対して差し向けている問いや批判に対して、著者はどのような回答を返してくるでしょうか。その回答が、テキスト上の根拠をもって予測できるならば、あなたはきちんと著者と対話できている可能性が高いです。回答の予測がつかない場合、あなたは著者の議論を無視した自分勝手な議論を展開している可能性が高いです。ご自身のレポートとテキストを見返して、確かめてみて下さい。）

- 明らかな誤字・脱字が目立つレポートもわずかに散見されました。レポートは他人に読んでもらうための文章ですから、提出前に必ず見直しをする習慣をつけて下さい。
- 字数が指定されている場合でも、原稿用紙のテンプレートを使う必要はありません。というよりも、指定されている場合を除けば使わない方が賢明

です。

【鷺田清一『じぶん・この不思議な存在』(13名)に対する講評】

- 著者が問題にしている「じぶん」とは異なる「じぶん」を例に出すことにより、著者の議論への否定・反駁を試みるレポートが数多く見られました。

【マイケル・サンデル『これからの「正義」の話をしよう』(3名)に対する講評】

- トロリー問題（暴走列車の例）や救命ボートの例などの倫理的な難問に思わず惹きつけられてしまう気持ちは分かります。とはいえ、それらの例はあくまでも「話の枕」であり、著者の主張はそれとは別のところにありますので、そこを掘り下げて批評するのはあまり好ましくありません。
- 著者が支持するコミュニタリアニズムの問題点を剔出しようとするレポートは、議論は少し荒削りでしたが、よい着眼点であったと思います。

【河合隼雄『子どもの宇宙』に対する講評(12名)に対する講評】

- 秘密や緘黙の例を取り上げたレポートが比較的多く見られました。
- 中でも、子どもの家出とアイデンティティの確立との関係をめぐる本書の議論を、別の課題テキスト（上掲書『じぶん』）や雑誌論文の記述を交えながら補強しようとするレポートは、優れた試みとして評価できます。引用ばかりに語らせるのではなく、適宜自分の言葉に置き換えつつ議論を組み立てることができれば、もっとよい論述になっていたと思います。

【大田堯『教育とは何か』(6名)に対する講評】

- 著者の議論の本筋とは離れたところにツッコミを入れようとするレポートが多く見られました。もっと著者と「対話」してもらえればと思います。

【斎藤環『社会的ひきこもり』(6名)に対する講評】

- 他の文献やウェブサイトなど、本書以外の外部情報を交えつつ議論を組み立てようとするレポートの割合が一番多く、「ひきこもり」問題に対する熱心な姿勢が窺われました。
- 中でも、本書が約20年前に刊行された著作であることに気づいて、現在の状況との違いを調べていたレポートは、優れた着想でした（古い本を読む場合、データや制度などが現在では変化している可能性を、常に念頭に置く必要があります）。ただし、元データ（政府の調査報告書）にアクセスするのではなく、それを報道する新聞記事から情報収集していたのが、少し残念でした。元データ（ウェブ上で簡単に閲覧可能）をよく読むと、報道では省略されていた詳細が分かり、違う解釈が出てくるかもしれませんよ。

以上